

FIVB ランキングに関する一考察

岡部 修一
Shuichi Okabe

1. はじめに

2012年8月11日ロンドンオリンピック女子バレーボール競技の3位決定戦において、日本は韓国をセットカウント3-0で破って銅メダルを獲得した。オリンピックでのメダルは、1984年ロスアンゼルスオリンピックの銅メダル以来7大会28年ぶりとなる。2年前の女子世界選手権大会3位銅メダルも1984年以来26年ぶりと話題となったが、オリンピックでの躍進、メダル獲得ともなればやはり世間の関心、注目の度合いが格段に違ってくる。世界選手権、ワールドカップ、オリンピックという世界三大タイトルにおいて26年間世界トップ3の座を離れていた日本の女子であるが、2010年～2012年に開催された直近の世界三大タイトルで3位、4位、3位と連続してトップ4に進出、安定した成績をあげた。

1960年代から80年代前半までの約20年間に14回行われた世界バレーボール三大タイトルにおいて、1位金メダル6回（オリンピック1964年東京大会と1976年モントリオール大会含む）、2位銀メダル7回、3位銅メダル1回、ほぼすべてが2位以内という輝かしい栄光の時代をもつ日本の女子が、その後キューバ、中国、ブラジルなどの台頭によって低迷し、苦節26年雌伏の時を経て、久しぶりに世界トップレベルに返り咲いた。現代の世界女子バレーボール界は高身長化が進み、男子並みのパワーが席捲している。世界強豪国の中で身長やパワーの点で劣勢にある日本が、世界3位の座を射止めることができた事実は、確かに誇るべき快挙といえよう。

ロンドンオリンピック開催前の7月8日、FIVB（Federation International de Volleyball：世界バレーボール連盟）発表の世界ランキングで日本は前回3位から2ランク降格し5位となり、ロンドンオリンピック終了後の8月13日付けの最新FIVBランキングでは、再び3位となった。

ロンドンオリンピック女子バレーボールの決勝戦は、世界ランキング1位アメリカと同2位のブラジルが対戦、金メダルはブラジル、銀メダルがアメリカであったが、世界ランキングに変更はなかった。

世界ランキングは他の競技でも多く採用され、世間の耳目を集めているのは、サッカー、テニス、ゴルフなどであろう。球技ではバレーボールはじめ、バスケットボール、ハンドボール、ホッケー等でも世界ランキングが公表されているが、日本ではオリンピック出場を果たすか否かで注目度が異なってくる。

本研究では、日本女子が上位ポジションを獲得しているFIVBランキングについて、問題点をあげ考察する。

2. バレーボール世界ランキングの算出方法

バレーボールの世界ランキングは、最大で過去4年間の公式国際大会の成績を元に算出される。対象となるのはFIVB主催で4年ごとに開催する「世界選手権」「オリンピック」「ワールドカップ」、毎年開催の「ワールドグランプリ」「ワールドリーグ」、さらにFIVB傘下の各大陸連盟主催で2年ごと開催の「大陸選手権」であり、対象の大会が終了する毎に更新される。

オリンピック		ワールドカップ		世界選手権				ワールドリーグ ワールドグランプリ		大陸選手権		オリンピック 世界選手権 予選
				男子		女子		順位	pts	順位	pts	
順位	pts	順位	pts	順位	pts	順位	pts					順位
1位	100	1位	100	1位	100	1位	100	1位	50	1位	30	オリンピック
2位	90	2位	90	2位	90	2位	90	2位	45	2位	26	大陸予選
3位	80	3位	80	3位	80	3位	80	3位	40	3位	22	世界最終予選
4位	70	4位	70	4位	70	4位	70	4位	35	4位	18	予選順位により
5位 (×4)	45	5位	50	5位	62	5位	62	5位	30	5位	14	3~1 pts
		6位	40	6位	56	6位	56	6位	25	6位	10	
9位 (×2)	15	7位	30	7位	50	7位	50	7位	15	7位	5	世界選手権
		8位	25	8位	45	8位	45	8位	12	8位	5	地域別の予選
11位 (×2)	5	9位	5	9位	40	9位	40	9位	10	9位	3	予選順位により
		10位	5	10位	36	10位	36	10位	8	10位	3	15~5 pts
		11位	5	11位	33	11位	33	11位	7	11位	3	
		12位	5	12位	30	12位	30	12位	6	12位	3	
				13位 (×6)	25	13位 (×4)	25	13位	4	13位	2	
								14位	3	14位	2	
				19位 (×6)	20	17位 (×8)	20	15位	2	15位	2	
								16位	1	16位	2	

表1 FIVB世界ランキングにおける大会ごとポイント数

日本バレーボール協会HP 世界ランキングより

表1はFIVBランキングの大会ごとのポイント数を示している。

ランキング対象の大会は重みづけによってポイント付与条件が異なる。オリンピック、ワールドカップ、世界選手権など4年ごとに開催される三大タイトルについては、1位100pt、2位90pt、3位80pt、4位70ptが付与される。毎年開催の男子ワールドリーグと女子ワールドグランプリについては、ほぼ半分の1位50pt、2位45pt、3位40pt、4位35ptが付与され、さらに2年ごと開催の各大陸選手権は、1位30pt、2位26pt、3位22pt、4位18ptが付与される。5位以下のポイントに関しては、順位決定戦の実施やリーグ戦など最終順位が明確に定まる場合は、順位ごとポイントが付与される。しかし予選リーグや準々決勝で敗退してそのまま終了する場合は、同順位並列でのポイント付与となっている。

オリンピック	4年間ポイントは継続(大会は4年に1回)。ただし1年ごとに25%ポイントが減少。
ワールドカップ	2年間ポイント継続(大会は4年に1回)。翌年は50%の減少。
世界選手権	4年間ポイントは継続(大会は4年に1回)。ただし1年ごとに25%ポイントが減少。
ワールドリーグ ワールドグランプリ	毎年更新
大陸選手権	2年間ポイント継続(大会は2年に1回)。翌年は50%の減少。
大陸予選	オリンピック、世界選手権の大陸予選。継続年数は本大会に同じ。なお本大会出場の場合は加算せず。

表2 FIVB ランキングのポイント有効期間

表2はポイントの有効期間を示している。三大タイトルのうちオリンピックと世界選手権のポイントは4年間有効(1年経過ごとに25%ずつ減少)、ワールドカップと大陸選手権は2年間有効(1年経過で50%減少)である。オリンピックと世界選手権への予選についてもポイントは4年間有効で1年ごとに25%減となる。

ポイントと有効期間の重みからいえば、FIVBはオリンピックと世界選手権の両大会を重要視しているといえる。オリンピックの出場国は12ヶ国と少ないが、他の多くの競技同様、世界最大のスポーツ祭典として4年に一度の真の世界チャンピオン決定大会と権威づけられている。これまでオリンピック前々年開催の世界選手権、前年開催のワールドカップのそれぞれ上位3カ国にオリンピック出場権が与えられてきたことから考えても、オリンピックが最上位の大会とみなされているのは明らかである。

24か国が出場する世界選手権は、FIVB主催の中で最大規模の世界一決定大会であり、オリンピックの華やかなイメージとは比べるよしもないが、実質的にはオリンピックと同等の重みづけがある。一方、三大タイトルの一つであるワールドカップは、オリンピックや世界選手権同様4年に一度の開催であるものの出場12カ国と少ないことが、重みの点で世界選手権に及ばぬ印象のため、ポイント有効期間が短くなっていると考えられる。

3. 女子バレーボール世界ランキングの現状

表3, 4はFIVBランキング女子の20位までを示している。

今年になってから3度更新されているが、表3は、6月8日～7月1日に開催された2012ワールドグランプリ(予選ラウンド:アジア地域、決勝ラウンド:中国 寧波)終了後、そして表4は7月28日～8月11日に行われたロンドンオリンピック女子バレーボール競技終了後の最新のものである。

1月発表時点で3位であった日本が、表3の7月4日付では5位に降格した。これは直前のワールドグランプリで決勝ラウンドにも進めず9位に終わったことが影響している。しかしこれは1か月後にオリンピックを控えた日本チームが、ある程度勝敗を度外視して戦術や選手起用の面でさまざまな試行錯誤を行なった結果といえる。そのロンドンオリンピックで3位銅メダル獲得を果たした日本は、8月13日付最新ランキングでは、再び3位に昇格している。表3、表4を見れば女子バレーボールはアメリカ、ブラジル、日本、イタリア、中国の上位5位までと6位以下の国にポイントの上で大きく差が開いていることがわかる。さらに上位5か国の中でもアメリカ、ブラジ

ルの2か国が3位日本以下に水をあけた2強を形成していることが明らかである。

5強以外の国で注目すべきはロシアであろう。ロシアは1998年以降の世界大会において4位以上の成績が7

FIVB Senior World Ranking - Women As per 9 July, 2012

Rk.	Teams	Points	+/- Rk.			World Grand Prix			World Cup			Continental Championship			World Championship			Olympic Games		
			Jan.	2012	2011	2011	2011	2011	2010	2008										
			2012	100%	100%	100%	100%	75%	25%											
			Diff.	Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.					
1	USA	245.00	0	↔	1	50	50	2	90	90	1	30	30	4	70	52.50	2	90	22.50	
2	Brazil	217.50	0	↔	2	45	45	5	50	50	1	30	30	2	90	67.50	1	100	25.00	
3	China	187.00	2	↘	5	30	30	3	80	80	1	30	30	10	36	27.00	3	80	20.00	
4	Italy	183.75	0	↔	10	8	8	1	100	100	4	18	18	5	62	46.50	5	45	11.25	
5	Japan	177.25	-2	↘	9	10	10	4	70	70	2	26	26	3	80	60.00	5	45	11.25	
6	Germany	119.25	2	↗	7	15	15	6	40	40	2	26	26	7	50	37.50	cq1	3	0.75	
7	Serbia	112.00	-1	↘	11	7	7	7	30	30	1	30	30	8	45	33.75	5	45	11.25	
8	Turkey	104.25	3	↗	3	40	40				3	22	22	6	56	42.00	cq4	1	0.25	
9	Russia	96.25	-2	↘							6	10	10	1	100	75.00	5	45	11.25	
10	Cuba	87.00	0	↔	6	25	25				3	22	22	12	30	22.50	4	70	17.50	
11	Dominican Rep.	72.75	-2	↘	12	6	6	8	25	25	2	26	26	17	20	15.00	wq1	3	0.75	
12	Thailand	72.00	0	↔	4	35	35				4	18	18	13	25	18.75	wq3	1	0.25	
13	Poland	59.75	1	↗	8	12	12				5	14	14	9	40	30.00	9	15	3.75	
14	Kenya	50.75	1	↗				12	5	5	1	30	30	21	20	15.00	cq1	3	0.75	
15	Korea	49.25	-2	↘	14	3	3	9	5	5	3	22	22	13	25	18.75	wq2	2	0.50	
16	Algeria	47.25	0	↔				11	5	5	2	26	26	21	20	15.00	11	5	1.25	
17	Peru	41.50	0	↔							3	22	22	15	25	18.75	cq1	3	0.75	
18	Argentina	39.00	0	↔	15	2	2	10	5	5	2	26	26	SA-B4	8	6.00				
19	Puerto Rico	37.50	0	↔	13	4	4				4	18	18	17	20	15.00	cq2	2	0.50	
20	Netherlands	30.25	0	↔							7	5	5	11	33	24.75	cq2	2	0.50	

表3. 2012年7月9日付 FIVB 女子ランキング

FIVB HP より

As per 13 August, 2012

Rk. Teams	Points	+/- Rk. July 2012 Diff.	Olympic			World Grand			World Cup			Continental			World		
			Games			Prix			Championship			Championship					
			2012			2012			2011			2011			2010		
			Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.	Rk.	Pts	Tot.
1 USA	312.50	0 ↔	2	90	90	1	50	50	2	90	90	1	30	30	4	70	52.50
2 Brazil	292.50	0 ↔	1	100	100	2	45	45	5	50	50	1	30	30	2	90	67.50
3 Japan	246.00	2 ↘	3	80	80	9	10	10	4	70	70	2	26	26	3	80	60.00
4 Italy	222.50	0 ↔	5	50	50	10	8	8	1	100	100	4	18	18	5	62	46.50
5 China	217.00	-2 ↘	5	50	50	5	30	30	3	80	80	1	30	30	10	36	27.00
6 Russia	135.00	3 ↘	5	50	50							6	10	10	1	100	75.00
7 Turkey	134.00	1 ↘	9	30	30	3	40	40				3	22	22	6	56	42.00
8 Dom. Rep.	122.00	3 ↘	5	50	50	12	6	6	8	25	25	2	26	26	17	20	15.00
9 Serbia	120.75	-2 ↘	11	20	20	11	7	7	7	30	30	1	30	30	8	45	33.75
10 Germany	120.50	-4 ↘	cq2	2	2	7	15	15	6	40	40	2	26	26	7	50	37.50
11 Korea	118.75	4 ↘	4	70	70	14	3	3	9	5	5	3	22	22	13	25	18.75
12 Thailand	74.75	0 ↔	cq1	3	3	4	35	35				4	18	18	13	25	18.75
13 Cuba	72.50	-3 ↘	cq1	3	3	6	25	25				3	22	22	12	30	22.50
14 Algeria	66.00	2 ↘	11	20	20				11	5	5	2	26	26	21	20	15.00
15 Poland	59.00	-2 ↘	cq1	3	3	8	12	12				5	14	14	9	40	30.00
16 Kenya	53.00	-2 ↘	cq1	3	3				12	5	5	1	30	30	21	20	15.00
17 Peru	43.75	0 ↔	cq1	3	3							3	22	22	15	25	18.75
18 Argentina	40.00	0 ↔	cq4	1	1	15	2	2	10	5	5	2	26	26	SA-B4 8		6.00
19 Puerto Rico	39.00	0 ↔	cq2	2	2	13	4	4				4	18	18	17	20	15.00
20 Great Britain	35.50	49 ↘	9	30	30							Eu-q2 1	1	EU-B3 6			4.50

表4. 2012年8月13日付 最新FIVB女子ランキング

FIVB HPより

回、しかも2006年、2010年と世界選手権2連覇を果たしている。これと同じ期間でみると現在ランキング1位のアメリカは4位以上8回であるものの優勝はなく、同2位ブラジルは4位以上10回、そして2008年、2012年のオリンピック2連覇を成し遂げている。

ロシアはソ連時代を含め伝統あるバレーボール強豪国である。1952年第1回世界選手権大会から今年のロンドンオリンピックまでの60年間、40回におよぶ世界大会において、最多記録となる優勝12回、準優勝7回という輝かしい戦歴を誇っている。本来ならばアメリカ、ブラジルと並ぶ世界3強ともいえるロシアが、FIVBランキング上は9位と6位である。これはロシアが2011年ヨーロッパ選手権で6位に沈んだことで同年11月のワールドカップに出場できず、ポイントをあげられなかったことが大きく影響している。

4. FIVB ランキングの問題点

FIVB ランキングにおける最大の問題は、日本が有利になっていることである。通常スポーツの世界大会では開催国に出場権が与えられる。バレーボールでも世界大会は開催国に出場権が与えられるが、その開催頻度に著しい偏りがある。

表6は、1998年以降オリンピックを除く世界大会の開催国を示したもののだが、15年間に開催された男女の世界大会30回のうち、実に26回が日本で開催されている。これは異常なほどの偏りと言わざるを得ない。世界大会が30年以上にわたり同一国で開催され続けるなど、他のメジャー競技ではまず考えられない。例えば歴史の浅いマイナー競技の世界大会で、参加国も少ないなどの理由によって開催国が固定されるような場合ならともかく、バレーボールは現在、FIVB加盟国が世界220カ国、サッカーやバスケットボールの加盟国をも上回るほどの競技であるにもかかわらずなのだ。

年	大会	開催国	
		女子	男子
1998	世界選手権	日本	日本
1999	ワールドカップ	日本	日本
2000	世界最終予選	日本	ポルトガル
2001	グラチャン	日本	日本
2002	世界選手権	ドイツ	アルゼンチン
2003	ワールドカップ	日本	日本
2004	世界最終予選	日本	日本*
2005	グラチャン	日本	日本
2006	世界選手権	日本	日本
2007	ワールドカップ	日本	日本
2008	世界最終予選	日本	日本*
2009	グラチャン	日本	日本
2010	世界選手権	日本	イタリア
2011	ワールドカップ	日本	日本
2012	世界最終予選	日本	日本*

表5 1998年以降のバレーボール世界大会の開催国

(オリンピックを除く)

* 男子の世界最終予選は日本を含む3カ国で開催された

オリンピック、世界選手権、ワールドカップの世界三大会における上位進出キャリアのある国を数えれば、男子は全42回の大会で優勝キャリア11カ国、トップ4進出キャリアは16カ国あり、女子全40回においても、優勝キャリアは6カ国、トップ4進出キャリアが17カ国ある。

このようにグローバル化されたバレーボールの世界大会が、日本1カ国に偏って開催されている事実は、日本バレーボール連盟とFIVBの利害と意向が一致した結果とはいうものの、本来のあるべき姿ではない。とりわけ最近15年では、世界選手権大会までもが男子1998年と2006年、女子も1998年、2006年、2010年

と日本で集中的に開催されている。

ワールドカップや世界選手権を自国開催すれば日本は自動的に出場が決まり、世界ランキングで常にポイントを獲得することができる。ワールドカップの出場はわずか12カ国であり、実力が拮抗し出場権獲得が難しいヨーロッパ大陸の場合などの実情を考えれば、開催国として毎回ポイント獲得を保障される日本は、FIVB ランキング上で極めて優遇され、公平性を欠くと言わざるを得ない。

ちなみに1993年以降、世界三大タイトルの開かれない年には「グラチャン」と呼ばれるワールドグランドチャンピオンズカップ（FIVB World Grand Champions Cup）が日本で開催されている。この大会には北中米、南米、ヨーロッパ、アジア各大陸のチャンピオン4チームとFIVB推薦チーム、そして日本の合計6チームが参加するFIVB主催の国際大会である。国内向けには世界一決定戦と銘打っているものの、実情は低迷する日本が世界のトップチームと対戦する国際的練習試合の意味合いが強く、一方FIVB側はルール改正に関する試験的大会として位置づけている。そのためグラチャンはFIVBランキング対象外である。

そしてオリンピック開催年にはオリンピック世界最終予選が開催されている。2004年以降は毎回日本男女が出場していることもあり、男女ともに日本で開催となっている。

これらの世界大会は、そのたびテレビ放映される。日本戦は男女とも全試合中継放送である。テレビ放映では大会ごとに「真の世界一決定戦」「世界No.1チーム決定」「大陸制覇国が世界制覇を狙う」などのキャッチコピーが掲げられ、視聴者は大会が世界一を決める大会であると錯覚する。しかし毎年のように世界大会が開催される現状では、世間の人々はいったいどれが世界一を決める大会なのか混乱するのである。そして日本1カ国に偏った世界大会の開催は、日本バレーボール協会と世界バレーボール連盟だけの意向ではなく、もう一つの勢力が関わっている。

5. 芸能イベント化したワールドカップ

「バレーボールのワールドカップはなぜ毎回日本で開催されるのか？」

「なぜバレーボールは毎年のように世界一決定戦を開催するのか？」

そのような疑問をこれまで多くの人から投げかけられてきた。

「ワールドカップ」と聞けば、多くの方は4年に一度のサッカー世界一決定戦を思い描くであろう。

とりわけ日本代表がワールドカップに初出場した1998年フランス大会以降は、その傾向が強いと思われる。しかしそれ以前は「ワールドカップ」といえばバレーボール、とされる時代があった。

1977年当時、日本のバレーボールは男女とも世界トップレベルに君臨していた。1960年代から80年代半ばまで男女のべ31回の世界大会において、金メダル（優勝）7個、銀メダル（2位）10個、銅メダル（3位）4個、計21個のメダルを獲得、3位以内の成績が7割近い確率というほどの強豪国であった。オリンピックでも1964年女子、1972年男子、1976年女子に金メダルを獲得したことで、バレーボールは野球を除く他の球技の追随を許さぬほど国内で絶大な人気を誇り、テレビや雑誌などマスメディアへの露出も非常に多かった。多くの日本人は学校体育などで経験があり、バレーボールは世界トップレベルの誇らしさと身近さを感じられる、まさに国民的スポーツであった。

このような時代の潮流に乗って、ある民法テレビ局がFIVBとの間で、バレーボールワールドカップ放映権の独占契約を結んだ。テレビ局側は、当時のバレーボール国内人気を背景として視聴率やスポンサー確保の点で期待が大きく、一方、FIVB側としてはテレビ放映料による収入が見込める上に、安定した大会運営が期待できるなど、

双方の利害が一致してのことである。この結果、FIVBの収益が増して財政的に潤い、日本国内のバレーボール人気も高まったといえる。しかし、その後の時代の移り変わりによって、さまざまな弊害を生むことになる。

テレビ放映権料は、大会主催運営組織に莫大な利益を生み出すものである。オリンピックも同様で、例えば2006年トリノ冬季大会と2008年北京大会がセットになった放送権料が約25億ドルであったものが、2010年バンクーバー冬季大会と2012年ロンドン大会のそれは約38億ドルと約1.5倍に高騰している。1984年ロスアンゼルス大会以降、IOC（International Olympic Committee：国際オリンピック委員会）はテレビ放映権料によって莫大な収入を得ることができている。

しかし、莫大な放映権料を支払うテレビ局や放送組織は、ただ金を出すだけではない。主催運営組織や統括団体に対して、いろいろな形で要求や注文を出してくる。まずテレビの中継に合わせた試合運営がおこなわれるようになる。1999年、テレビの中継時間にあわないという理由から、ルール改正が行われた。従来の、サーブ権を得ているチームのみが得点する権利があるという「サイドアウト制」から、サーブ権にかかわらず得点を得られる「ラリーポイント制」に改定されたのである。これは、サイドアウト制ではゲームの終了時刻がわからず、テレビ中継に支障がでるというメディアからの要請に合わせた形だった。

その後、1990年代以降、日本のバレーボールは苦難の時代を迎える。新たな国々の台頭によって世界トップレベルの座から陥落し、さらに強化発展を支えた企業チームが国内経済状況の悪化によって次々と休廃部に追い込まれた。絶大な人気を誇った時代は終焉を迎え、低迷の時代が続いた。

この時代にテレビ放映権を手放そうとしなかった民放テレビ局は、バレーボール世界大会のテレビ放映を継続する代わり、世界に類をみない奇策を打ち出した。大手芸能事務所と提携し、大会を盛り上げてサポートするため、芸能人にパフォーマンスさせるというものであった。当初はテーマ曲を歌う、あるいはレポーターへの起用など控え目な活動であったものが、やがては日本へエールを送るという大義名分の元、試合前のコート上で歌いながらダンスを披露する派手なパフォーマンスへと過激化する。そして大手芸能事務所はワールドカップが開催される4年ごと若手人気グループをデビューさせるという売り出し戦略を立てた。彼らの多くがその後芸能界でメジャーな存在となったが、その一端にワールドカップでのパフォーマンスが貢献したことは間違いない。若手タレントグループたちの試合前コートパフォーマンスは、やがてローラースケートを履いて踊りながら歌うものさえ登場した。コートは神聖なものであるとの論理をふりかざすつもりはないが、常識的に考えて世界連盟主催の公式な世界大会の試合直前に、コート上をローラースケートで走り回って歌い踊りながら新曲をPRするというのは極めて奇異な光景であり場違い以外の何物でもない。国家を代表する選手たちがプライドを賭け、責任感とプレッシャーにつぶされそうになりながらの真剣勝負直前に、営利活動の歌やダンス、ローラースケートなどの派手な芸能ライブショーは全く必要ない。

派手で過剰、過激化する演出やパフォーマンスに対して、バレーボールファンや一般視聴者からも行き過ぎとの批判が高まっていた。FIVBは2011年ワールドカップ大会から、試合前のパフォーマンスは禁止とするルール変更を決定する。この結果、試合前のコート上で若手アイドルタレントたちの歌やダンスのパフォーマンスは行なうことができなくなった。

特定の芸能事務所とテレビ局が公式な世界大会を利用し、競技以外の部分であたかも芸能イベントのような盛り上がりを見せる状況は世界的にみてもやはり異常で、看過できなくなったFIVBがついにその改善に乗り出したということである。

6. 日本開催の功罪

世界大会の90%近くが日本で開催されているというのは、異常なほどの偏りである。またワールドカップが30年以上、同一国で開催され続けるのも、他の競技では考えにくい。国際大会の開催国については、FIVBが以下の点を考慮し決定している。

1. 入場料収入、テレビ放映権料など収益があがること
2. 観客数が期待でき、観客による暴動・騒乱の不安要素がないこと
3. 治安がよく犯罪被害にあうことなく安全に滞在できる
4. 飲食に関して衛生的で安全であること
5. 交通機関、練習会場、宿泊施設などのインフラが充実していること

このうち収益では日本は民放テレビ局の放映権料が確約され、観客動員の手法はともかく入場者が見込めることは間違いなし。これまで数多く国際大会を開催してきたノウハウの蓄積によって、大会運営に関する不安が少なく、収益以外の条件についても過去に大きな問題が発生したことがない。したがってFIVBとして世界大会の日本開催は、望ましい形なのである。そして日本バレーボール協会も招致に積極的であることから、双方の意向の一致によって日本開催が多くなったと考えられる。日本バレーボール協会が開催に積極的なのは、むろん世界大会における日本の試合環境をより良くしたいがためであろう。ただその思惑があまり露骨になり過ぎて、最近では日本人からも疑問の声があがっている。

今年6月1日から10日に東京体育館で行われたロンドンオリンピック男子バレーボール世界最終予選東京ラウンドの期間中、イランチームのジュリオ・ベラスコ監督は、日本の試合だけテクニカルタイムアウトの時間や第2、3セット間の休息時間が長いことに対し「同意できない。これは五輪予選で全てのチームが同じ条件でやらないといけない」と批判した。FIVBの広報担当は、大会中継権を持つテレビ局から要請があって、FIVBが承認すれば時間変更できるとしたが、同監督は「こんなことをやっているのはバレーボールだけだ」と憤った。要はテレビ中継の都合上他チームにはない特例措置であり、ベラスコ監督の言葉どおり不公平のそしりはぬぐえない。

さらにオリンピック最終予選は、午前11時開始の第1試合から午後7時過ぎ開始の第4試合まで1日4試合が組まれていたが。日本は男女とも全試合夜7時過ぎから始まる第4試合に固定されていた。他国チームは午前11時開始の第1試合から第4試合まで、さまざまな時間帯の試合をこなさねばならないのに、日本だけが常に同時間帯の試合が約束されていたことになる。さらにタイムアウトやセット間休憩時間も長めに設けられるなど、コンディション調整上、日本は極めて優遇されていたといえる。

また長年疑念をもたれているのは、自国開催の世界大会の組み合わせ（対戦国の順番）において、日本が対戦順を希望どおりに操作しているのではないかということである。これまでの日本開催の世界大会組み合わせ（対戦試合の順序）のほとんどが、日本にとって都合のいい理想的なものに思われる。これは対戦順を指定できる開催国特権によるものといわれているが、一部の試合だけでなく全試合の対戦順を指定できるのならば、それは行き過ぎた特権といわざるを得ない。

世界大会の自国開催は、放映権契約を結んだ民放テレビ局のおかげで、国民への大きなアピールの場となっている。国民の娯楽と称されたプロ野球でさえ地上波での中継放送が激減している今の時代に、ゴールデンタイムと呼ばれる夜7時～9時（放送延長もある）の時間帯に、日本男女すべての試合の中継あるいは録画放送がほぼ毎年恒例で行なわれている。これは実に驚くべきことである。バレーボール以外の競技でこれほど手厚く中継放送が行われることは、サッカーワールドカップ以外は、まず皆無である。

その反面、放映権をもつ民放テレビ局の過剰な要望を無秩序に受け入れて、世界大会を芸能イベント化したり、テレビ中継上の都合で日本だけに有利な特例ルールを設けることは、短絡的、刹那的な人気取り策と言わざるをえない。最良の引き倒しの不公平さを続けていけば、やがてバレーボール界の良識や倫理観を疑われて人心から見放されることも考えられる。長期的なバレーボールの人気定着や普及振興にとって決して得策ではない。日本バレーボール協会の節度ある判断が求められるところである。

7. まとめ

FIVB ランキングは、度重なる日本での世界大会開催による公平性の問題があると言わざるを得ない。1998年以降の15年間に行われた男女のべ30大会で、86%にあたる26回が日本開催である。開催国には出場権が与えられており、日本は24カ国出場の世界選手権や12カ国出場のワールドカップを常に予選免除で無条件に出場することができる。これらの大会に出場すればFIVB ランキングにポイントが加算され、ランキング上で大きなアドバンテージを得ることができる。

さらに放映権料を拠出し放映権をもつ民放テレビ局の意向や要望によって、日本が優遇される状況にもある。世界大会はあくまで出場国が公平な状況で競技されるべきで、とりわけオリンピック最終予選ではオリンピック出場を賭け、必死で悲壮な闘いが演じられる。そこに芸能イベントを絡ませたり、日本に有利な特例措置を行うというのは、他の出場国に対し失礼で国際的に通用するものではない。

テレビ局やスポンサーにとっては視聴率が重要で、最近では各民放テレビ局が独占放映するさまざまな競技の世界大会でのタレント起用が増えている。著名芸能人や若年層に人気絶頂のアイドルをキャスターやナビゲーター、リポーターに登用するのは時代の流れとしてやむを得ないことかもしれない。ただスポーツ大会において芸能人はあくまで脇役であり、露出も必要最少限に留めて選手と芸能人のどちらが主役かわからないような演出は避けるべきである。日本で開催されるバレーボール世界大会での、民放テレビ局と大手芸能事務所が一体となった演出とパフォーマンスは度を越していると言わざるを得ず、誤解を恐れずに言えば、スポーツ文化が芸能界の価値基準に蹂躪されているのである。日本バレーボール協会は、タレント頼みのバレーボールと揶揄されていることについて真剣に考えなければならない。

ワールドカップについては、次回2015年大会も日本開催が決定している。ただ2011年大会まではオリンピック出場権を上位3カ国に与えられていたのが、次回からは2カ国に変更された。出場12カ国でオリンピック出場権3カ国獲得は多いと判断したためと言われている。次回2014年の世界選手権は男子ポーランド、女子イタリアと決定している。

またFIVBで1984年から2008年まで24年間の長期にわたって会長を務めたメキシコ人のルーベン・アコスタ・フェルナンデス氏は、日本バレーボール界の重鎮であった故松平康隆氏と親交が深く、その関係の中でFIVBの施策が日本寄りになったこともあったと言われている。2008年アコスタ前会長退任の後を受け、会長となった中国のウェイ・ジジョン氏は、「今後のFIVBは民主的に運営される」と述べた。今後FIVBは、これまでの日本偏重の方針を是正する方向で動く可能性がある。前述した2011年ワールドカップ大会の試合前パフォーマンス禁止のルール変更がその一端とすれば、今後は世界大会での過剰な日本優遇の特例措置なども縮小されていくかもしれない。身びいきと優遇措置に擁護されてきた日本バレーボール界にとっては厳しい現実が突きつけられるかもしれないが、バレーボールのグローバル化が正道を歩むためにも、公正な形で世界大会を運営し、その魅力を広めていくことこそが必要不可欠である。

参考文献

<http://www.jva.or.jp/japan/records/ranking> 日本バレーボール協会 HP

http://www.fivb.org/en/volleyball/VB_Ranking_W_2012-08.asp FIVB HP

<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/volley20090401/article/3887> sportsnavi plus 排球博客

岡部修一（2011）日本バレーボール界の変遷 - トップレベルのリーグ40年の変遷について -
奈良産業大学紀要 第27集

（2012）世界バレーボール界トップ4の変遷 奈良産業大学地域公共学総合研究所所報 第2集

日本バレーボール学会・編 NBP MOOK Volley pedia バレーペディア 日本文化出版 2010